

# 自由われらの園

## 国府高校100周年

国府高校にとって一九七五(昭和五十)年七月二十九日は、校史に残る特別な日だ。全国高校野球選手権大会愛知大会の決勝戦。野球部は愛知高に4-1で勝利し、創部二十七年目にして初めて、悲願の甲子園出場の切符をつかんだ。

三年生だった下手投げのエース、青山久人さん(ニミ)元中日ドラゴンズ投手を擁する国府高は愛知大会一、二回戦を完封で勝ち上がる。優勝候補筆頭の中京高(現・中京大中高)と対戦。両チームは、その年の春季県大会でも優勝を懸けて戦っており、三回戦は「事実上の決勝」とも言われた。

先発したのは、当時二年生の正捕手で上手投げの市川和正さん(ニミ)元横浜大洋ホエールズ(現在の横浜DeNAベイスターズ)捕手。「点を取られたらやら

れる。どこで(青山投手に)代えるかが勝負の分かれ目だった」と元部長の藤田良彦さん(元ニミ)豊川市国府町は振り返る。

三回一死二塁からマウンドを託された青山さんはピッチを切り抜けると、強打の中京打線を相手に完封リレー。「打倒中京を合言葉に練習してきた。これで甲子園に行けると確信した」という。その後も国府高は名古屋電気工高(現・愛工大名電高)など私学の強豪校を破り、愛知の頂点に駆け上った。

決勝戦後、国府駅前甲

### 歴史編⑤

## 75年、夏の甲子園



①甲子園初出場を果たした選手たち ②国府駅前で甲子園出場を決めた選手を迎える人々=いずれも国府高提供

子園出場を喜ぶ人であふれ返った。ユニホーム姿で駅

に到着した選手たちは「おめでとう」「よくやった」と地域住民らの祝福を受けながら、優勝旗を手に学校までの道のりを歩いた。甲子園は初戦で柳井商高



の大応援団。国府高の応援うちわがあちこちで揺れ、当時三年生で応援団長を務めた春田和彦さん(ニミ)同市牛久保町は「本当に壮観でした。グラウンドの選手たちも頼もしかったと思う」と話す。

大声援の中での夢舞台だったが、惜しくも0-1で敗れ、甲子園での一勝は後輩に託された。「やっと実現した甲子園でのゲームは一試合で終わった。それでも地元の選手ばかりが集まった公立のチームが、夏の甲子園に行けたということは今も誇りに思つ」と藤田さん。

(山口)と対戦。二〇〇一年発行の「国府高校野球部五十年史」によると、後援会が用意したバスは百二十六台。そのほか地域の有志が調達したバス、鉄道で駆けつけた人、関西在住の同窓生らを含め、国府高を応援するために計二万人強が甲子園球場につめかけた。アルプス席だけでは収容しきれず、外野席と内野席にも分かれて入場するほどです。

# 2万人 スタンド沸いた